

平成十五年五月二十五日（日）

第三一五回 史跡めぐり

武藏陵と

武田氏に縁のあるまち

八王子を訪ねる

越谷市郷土研究会



第三一五回 史跡めぐり

武藏陵と

武田氏に縁のあるまち

八王子を訪ねる

日 時 平成十五年五月二十五日（日）

集 合 南越谷駅前

時 間 午前八時

コース 南越谷駅 → 武藏野線西国分寺駅 → 中央線高尾駅 → 高樂寺 → 武藏陵 → 陵南公園（昼食） → 御陵入口（バス） → 織物横丁 → 産千代稻荷神社（大久保石見守長安陣屋跡） → 信松院 → 八王子郷土資料館 → 時の鐘（念佛院） → 八王子駅 → 往路と逆の経路で南越谷駅

参加費 二千五百円（交通費、資料代、保険代を含む）

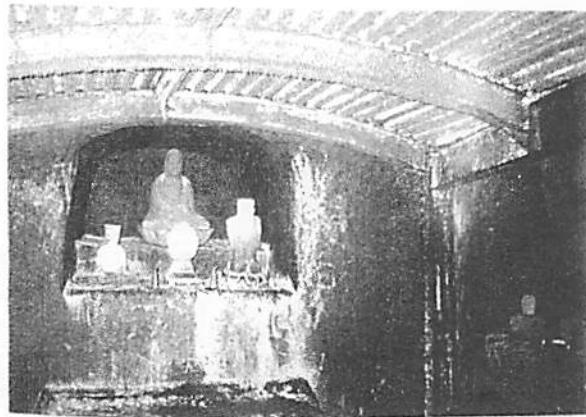
案内者 理事 菅波昌夫

昼 食 各自持参



■ 高楽寺

天正元年（一五七三）北条氏照が甲州の武田氏に備えて城を築き、八王子権現を城中に勧請して八王子城と名付け、城下を八王子村とよばせたことが、地名の始まりと伝えられている。



● 北条氏略系図

伊勢
長
氏
（北條早雲）
氏
政
（北條早雲）
氏
照
（北條早雲）
氏
邦
（北條早雲）
氏
新九郎
（北條早雲）
氏
直
（北條早雲）

氏
綱
（北條早雲）
氏
康

氏
政

左京大夫・相模守・歎流斎

氏
直

氏
照

秀三・陸奥守・八王子、根本、古河、栗原、小山城主

氏
直

氏
邦

新大郎・安房守・林杉、箕輪城主

氏
直

氏
規

勘五郎・美濃守・喜山、鈴木、三崎城主

氏
直

氏
忠

左衛門佐・大内守・佐野宗義賀子

氏
直

氏
堯

佐野、足柄城主・左衛門佐・小机城主

氏
直

氏
秀

景虎・上杉守・佐野

氏
直

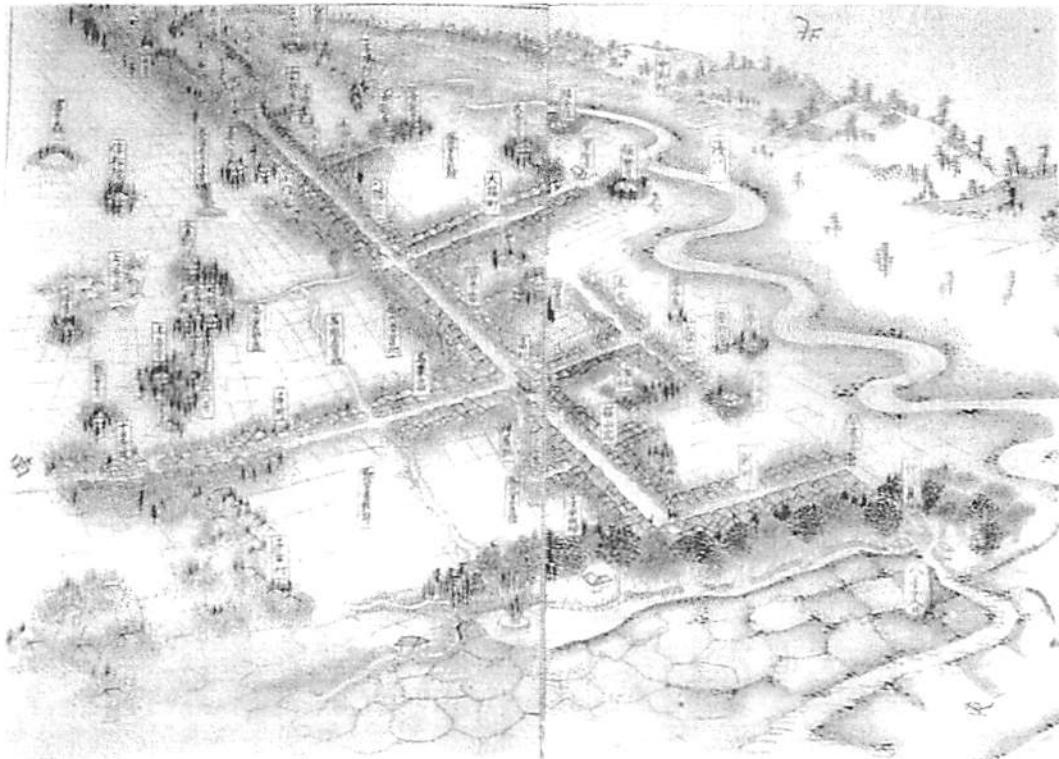
氏
秀

景虎・上杉守・佐野

氏
直

独峰山高樂寺と号し、新義真言宗。高尾山藥王院末寺である。開山は法印觀応で、天文二年（一五三三）建立したと伝えられている。本尊は木像不動明王立像。当寺を有名にしたのは天明（一七八一～八八）の大飢饉のおり了辯和尚が、淨財を投じて独力で洞窟を掘り、中に三十三觀音と藥師如來などの石仏を安置したことである。洞窟はコの字型、全長三十米、入ると正面壇上に弁財天、毘沙門天、不動明王、右側正面には藥師如來、大黒天、十王像が安置され、その間に一番から三十三番の觀音が並べられている。

甲州道中



八王子宿全景『新編武藏風土記稿』文政5年（1822） 国立公文書館蔵

成り立ち 江戸に幕府を開いた徳川家康は、慶長6年（1601）日本橋を起点として、公用の旅行や物資の輸送に備え東海道に伝馬制を定めた。そして各宿に人馬の継立や旅宿施設の整備をし、五街道などの幹線道路の整備も順次おこなった。甲州道中は中世から甲斐国と武藏国とを結ぶ道を基礎として、初め江戸から甲府までが整備され、その後中山道と合流する下諏訪まで延長されたと考えられている。もとは甲州海道と呼ばれていたものが、海端の道ではないとの理由で、正徳6年（1716）に甲州道中と改称された。道程約53里（208.5km）で、内藤新宿から上諏訪まで45宿32継といわれる。甲州道中では各宿で人足25人、馬25疋の常備が定められていた。甲州道中は数宿が交代で宿継ぎをおこなったり、上りや下りのみの片道継立といった変則的な宿継が多いが、これは各宿の宿高が少ないとや、宿間が比較的短く、交通量が少ないという理由が考えられている。

八王子の宿 天正18年（1590）八王子城が落城した後、八王子城下から現在の八王子市街である横山に横山宿・八日市宿・八幡宿を再建し、その後八木宿がつくられ、新しい町がつくられていった。また小門町付近は代官屋敷が立ち並び、代官頭大久保長安のもとで甲州道中の整備がお

こなされたといわれている。

八王子宿は十五の宿からなるが、横山・八日市の二宿が伝馬宿として人馬の継ぎ立ての一切を取扱う問屋場や本陣・脇本陣などが置かれていた。奇数月は横山宿、偶数月は八日市宿が交代で伝馬役を務め、そのかわりに市の開催権が与えられていた。現市域には他に駒木野宿、小仏宿があり、この二宿も交代で宿継をしていた。



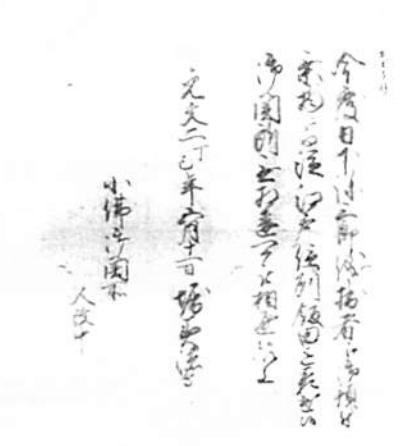
五街道

甲州道中の通行 交通の要所には関所が配備され、人や物資の流通・統制を行ったが、小仏関は甲州道中で最も重要な関所といわれ、通行には身元の確認となる手形が必要だった。甲州道中は険路が多く、公用通行（幕府・幕吏・大名・大寺院など）が無賃または規定賃銭にて人馬を使用すること）が比較的少なかったので、参勤交代で通行したのは、高島藩、高遠藩、飯田藩の信州三藩のみであった。その他の公用通行で代表的なものには、寛永9年（1632）から制度化され、宇治のお茶を幕府に献上する行事である茶壺道中や、享保9年（1724）の甲府藩廃止後幕府の直轄領となった甲府の政務と、甲府城の守護を目的に設置された甲府勤番の通行や、江戸との連絡などで利用した八王子千人同心の通行がある。一方民間の通行では、甲州道中の大月から富士道にはいり富士山登山をする富士詣、甲府から富士川沿いの身延道を通り久遠寺を参詣する身延詣などがある。こうした人や物の往来によって江戸の文化は、八王子、甲府、信州方面へ伝播していった。安政6年（1859）に横浜が開港すると輸出用生糸の輸送や、外国人の小旅行にも利用された。

甲州街道 江戸と信州とを結ぶ道として重要だった甲州道中は、明治5年（1872）に問屋制を含む宿駅制度が廃止され、民営の陸運会社が設立された。明治13年（1880）には馬車が、明治22年（1889）には甲武鉄道（現在の中央線）が新宿ー八王子間に開通し、交通手段は変化した。そして道路の法令により国道に指定され「甲州街道」と呼ばれるようになった。明治21年（1888）には大垂水峠が開削され、現在の国道20号線とほぼ同じ経路となった。



駒木野関所（駒木野関所）『桑都日記』極楽寺藏



関所手形

高八百六拾貳石余
武列多摩郡

横山宿

元横山村

駒木野宿
一里二拾七丁
但服總

小佛宿
一里拾八町

日光道

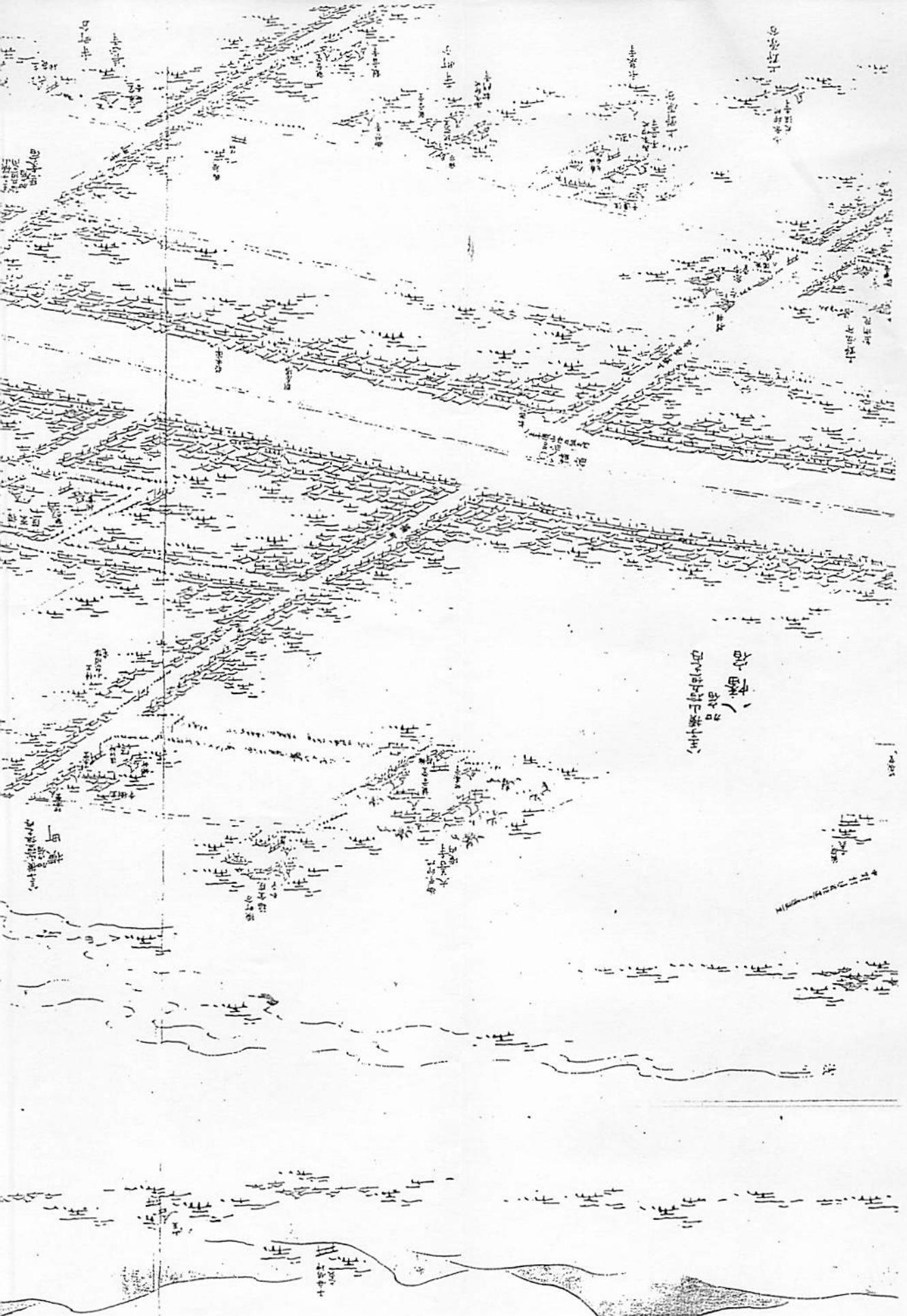
本宿

中野村

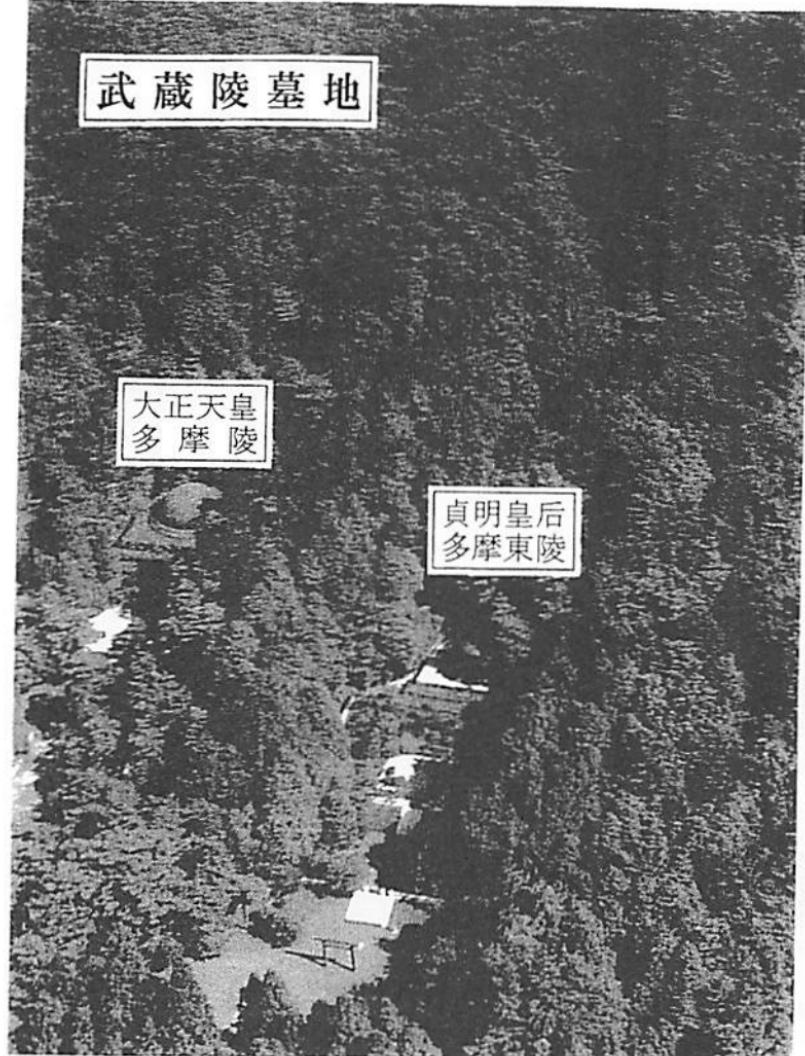
八日市宿
八日市宿
八日市宿

八日市宿

元横山村



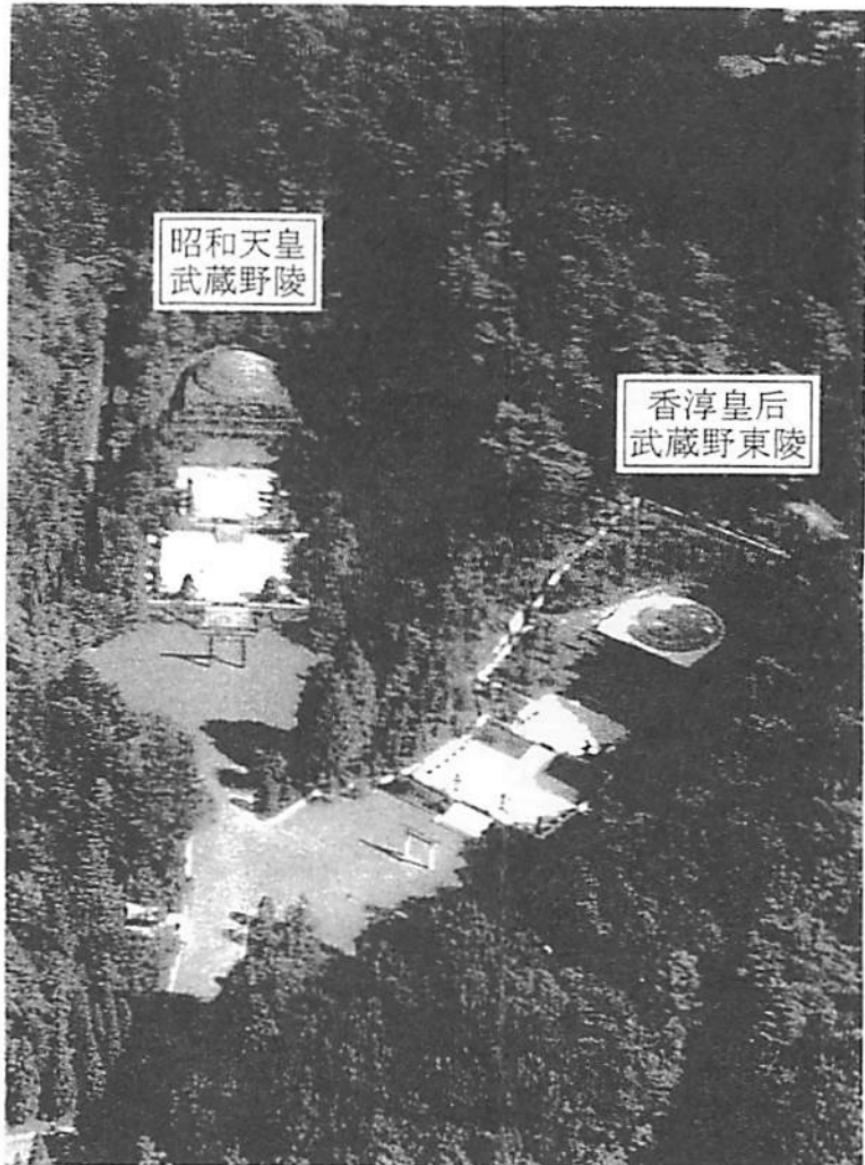
武藏陵墓地



むさしりょうぼち 武藏陵墓地

昭和2年（1927）、南多摩郡横山村ほか2町村にまたがる御料地が大正天皇の陵所として選定されました。その後、将来とも陵墓を営建すべき地としてその御料地に隣接する民有地が買い上げられ、現在は八王子市長房町・甘里町及び元八王子町にまたがる約46万平方メートルを有しています。約400メートルの参道の両側には京都の北山杉が約150本植栽されており、自然と調和した雰囲気を醸し出しています。

ここに大正天皇多摩陵、貞明皇后多摩東陵、昭和天皇武藏野陵及び香淳皇后武藏野東陵の4陵があります。



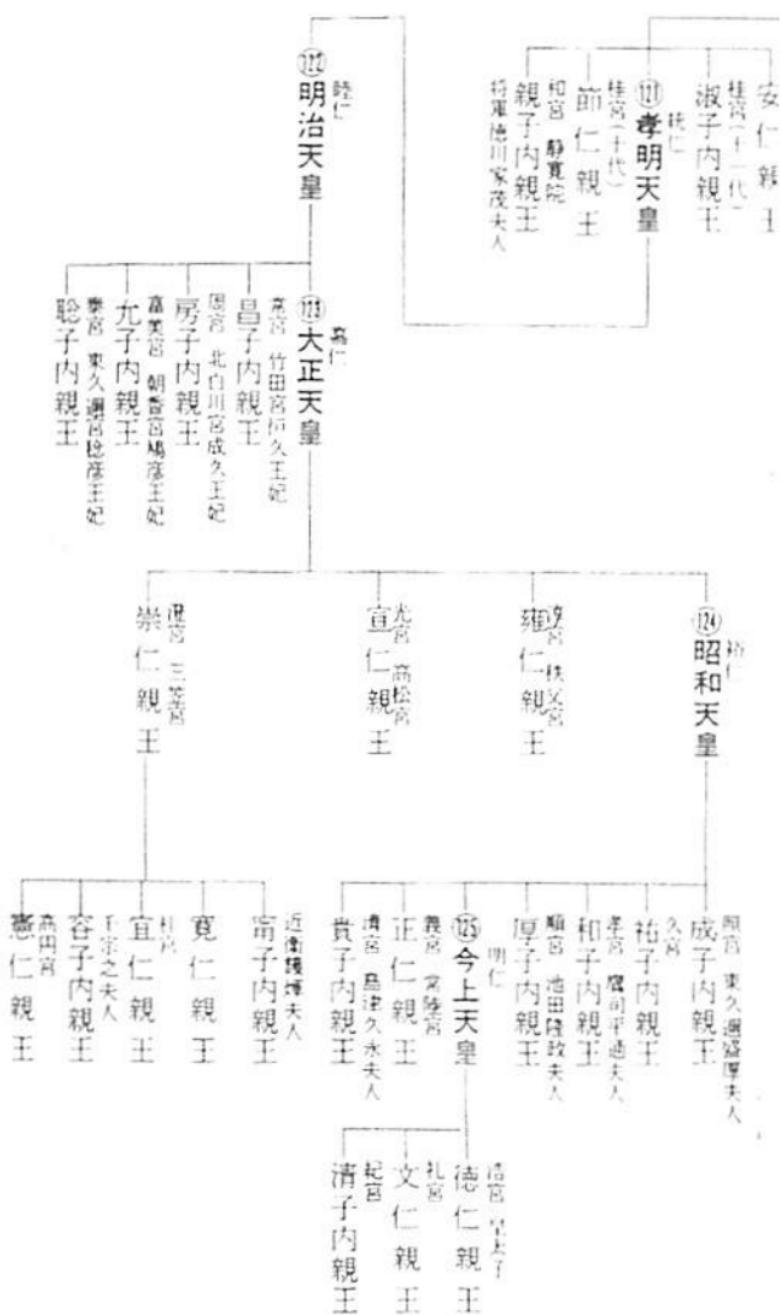
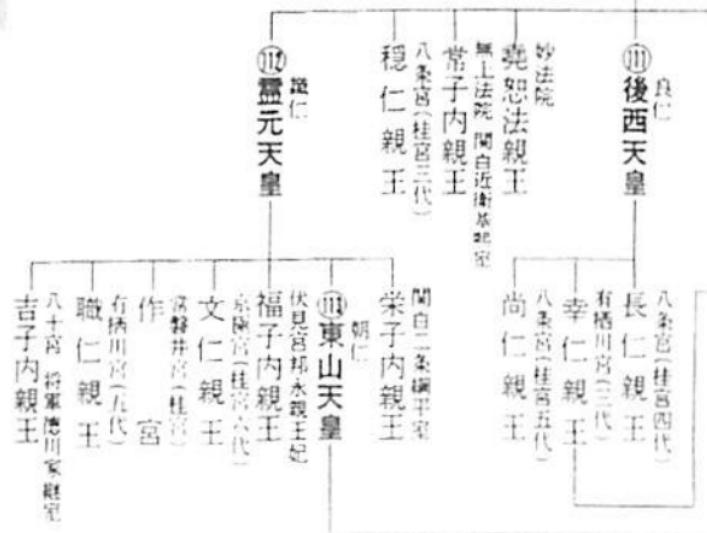
陵 墓

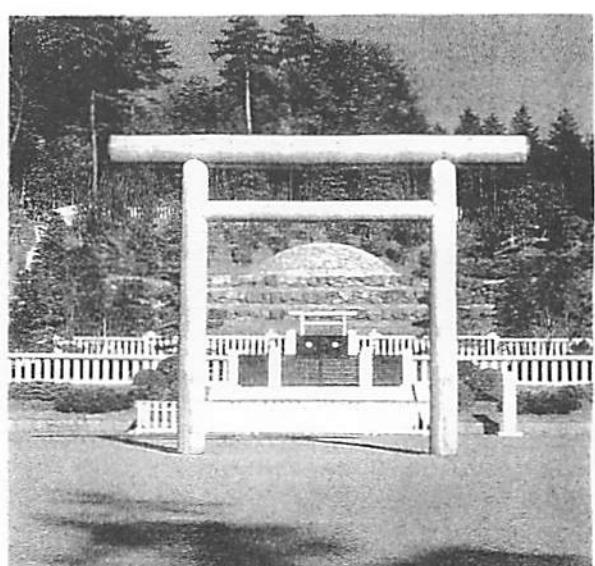
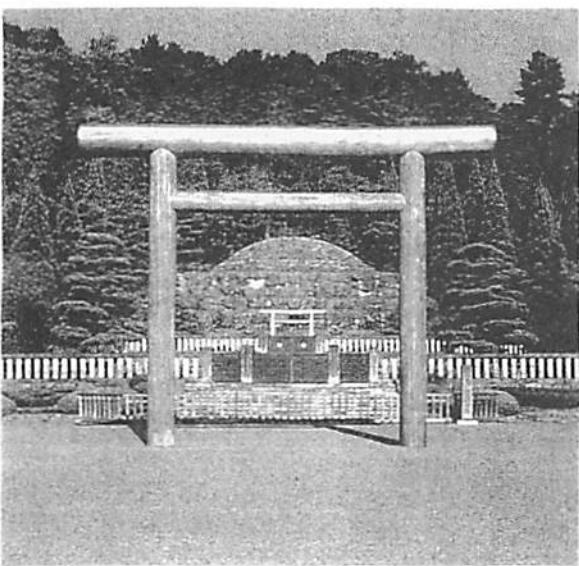
近畿地方を中心として、北は山形県から南は鹿児島県まで1都2府30県にわたり、陵188、墓551のほか分骨所・火葬塚・灰塚などの陵に準ずるもの42、髪歯爪塔など68、陵墓参考地46があり、総計895に及んでいます。箇所数としては、同域のものもあるので、457箇所です。形状は、時代によって異なりますが、古くは、円墳や前方後円墳などの高塚式の広大なものが多く、中でも仁徳天皇陵(大阪府堺市大仙町)は三重濠を巡らす前方後円墳で、面積約46万4千平方メートルを有する最大規模のものです。やがて、薄葬思想や仏教の影響による火葬も行われたことから陵墓の規模は小さくなり、平安時代末期からは法華堂、多宝塔及び石塔などを用いて寺院内に葬ることが多くなり、孝明天皇陵からは円丘や上円下方の高塚式となっています。

みささぎ

○ 「陵」とは、天皇、皇后、太皇太后及び皇太后を葬る所をいいます。

明治・大正・昭和
三代





昭和天皇 武藏野陵

- 昭和天皇(第124代) 大正天皇の第一皇男子。御名は裕仁：明治34年4月29日御誕生になり、昭和64年1月7日皇居で崩御（御年87歳）され、平成元年2月24日大喪の礼・大喪儀（斂葬の儀）が行われました。
- 陵名の由来：「武藏野」は、古く万葉集にも見られますが、昭和天皇は、御製にも「武藏野」をお詠みになり、またその自然を愛されたことで由縁があることから、「武藏野陵」と定めされました。
- 陵形：上円下方で、大正天皇多摩陵と同形です。
- 墳塋：上円部が3段、下方部が3段、総高8.75メートルとなっています。
- 兆域（面積）：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった桜・アケボノスギ（メタセコイア）等草木55種を植栽、面積2,500平方メートルを画しています。
- 陵の営建：平成元年4月17日に起工し、翌年1月6日に竣工しました。

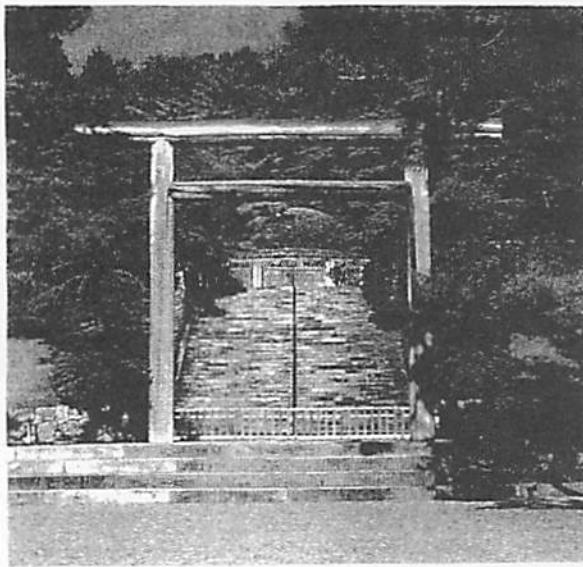
第124代昭和天皇



香淳皇后 武藏野東陵

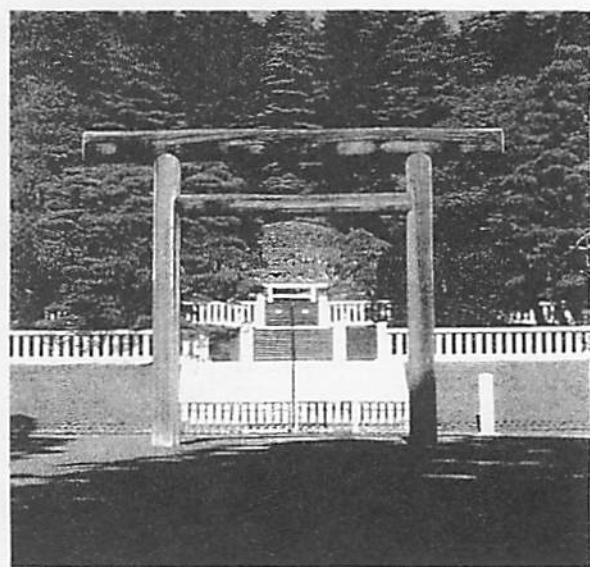
- 香淳皇后 昭和天皇の皇后。御名は良子：久邇宮邦彦王の第一王女として明治36年3月6日御誕生になり、大正13年1月26日皇太子裕仁親王と御結婚、大正15年12月25日皇太子裕仁親王（昭和天皇）の践祚（即位）とともに皇后となられ、昭和64年1月7日の天皇崩御の後は皇太后としてお過ごしでした。平成12年6月16日吹上大宮御所で崩御（御年97歳）され、平成12年7月25日大喪儀（斂葬の儀）が行われました。
- 陵名の由来：昭和天皇武藏野陵の東方に設けられたので、「武藏野東陵」と定められました。
- 陵形：上円下方で、昭和天皇武藏野陵と同形ですが、規模が少しこなっています。
- 墳塋：上円部が3段、下方部が3段、総高6.25メートルとなっています。
- 兆域（面積）：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった、桃・バラ等草木40種を植栽、面積1,800平方メートルを画しています。
- 陵の営建：平成12年9月25日に起工し、翌年6月15日に竣工しました。





大正天皇 多摩陵

- 大正天皇(第123代) 明治天皇の第三皇男子。御名は嘉仁：明治12年8月31日御誕生になり、大正15年12月25日神奈川県葉山御用邸附属邸で崩御（御年47歳）され、昭和2年2月7日・8日大喪儀（斂葬の儀）が行われました。
- 陵名の由来：万葉集などに出てくる「多摩の横山」及び日本書紀・統日本後紀などに出てくる武藏国を中心「多摩（麻・磨）郡」にちなみ、「多摩陵」と定められました。
- 陵形：上円下方です。これは明治天皇伏見桃山陵などを範に定めされました。
- 墓壇：上円部が3段、下方部が3段、総高10.61メートルとなっています。
- 兆域（面積）：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった盆栽、庭木等を植栽、面積2,500平方メートルを画しています。
- 陵の営建：昭和2年5月2日に起工し、同年12月23日に竣工しました。



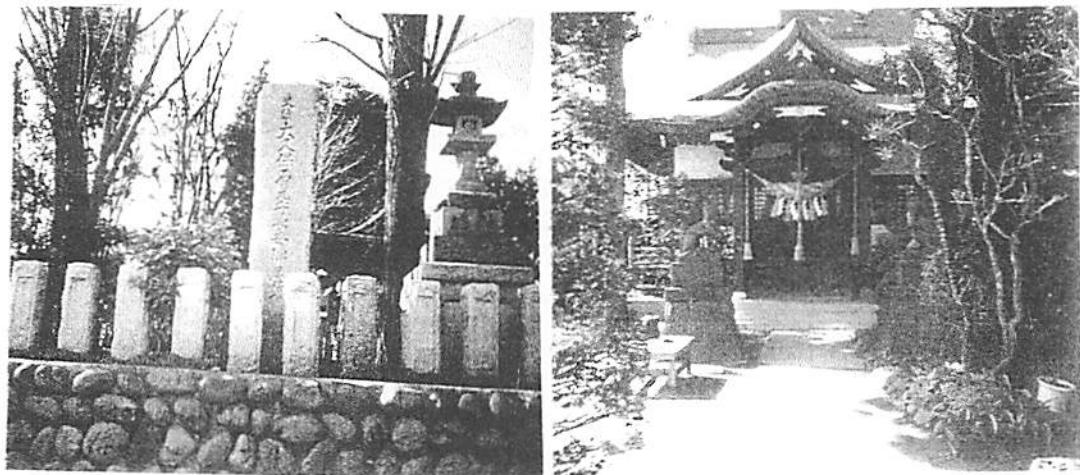
貞明皇后 多摩東陵

- 貞明皇后 大正天皇の皇后。御名は節子：公爵九條道孝の第四女として明治17年6月25日御誕生になり、明治33年5月10日皇太子嘉仁親王と御結婚、明治45年7月30日皇太子嘉仁親王（大正天皇）の践祚（即位）とともに皇后となられ、大正15年12月25日の天皇崩御の後は皇太后としてお過ごしました。昭和26年5月17日大宮御所（赤坂御用地）で崩御（御年66歳）され、昭和26年6月22日大喪儀（斂葬の儀）が行われました。
- 陵名の由来：大正天皇多摩陵の東方に設けられたので、「多摩東陵」と定められました。
- 陵形：上円下方で、大正天皇多摩陵と同形ですが、規模が少し小さくなっています。
- 墓壇：上円部が3段、下方部が3段、総高6.25メートルとなっています。
- 兆域（面積）：御拝所に鳥居を配し、周囲には御生前御愛好になった梅・桃等50余種の草木を植栽、面積1,800平方メートルを画しています。
- 陵の営建：昭和26年9月10日に起工し、翌年5月1日に竣工しました。



第123代大正天皇





■ 産千代稻荷神社

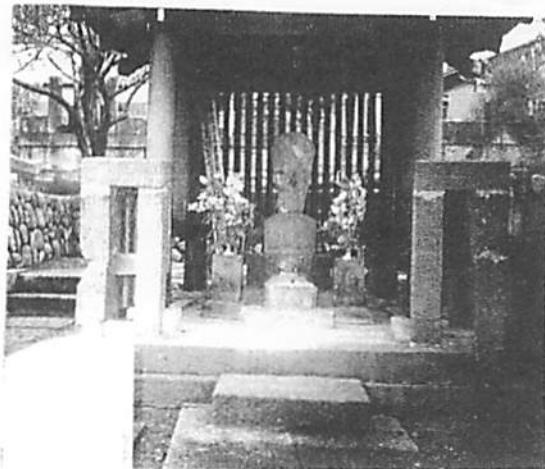
祭神は、^{うがのみたまのかこと。}倉稻魂命。慶長八（一六〇三）八王子奉行大久保石見守長安の陣屋内土手に鬼門除けの守護神として稻荷社を創立された。江戸時代から近辺には大木が多く、稻荷の森との別名もあつた。亦狐伝説により産子與く産千與く産千代と変化したとも伝えられる。安産至福の神として多摩一円に知られている。

■ 大久保石見守長安陣屋跡

大久保長安（一五四五—一六一三）は金春流の流れをくむ大藏流猿樂師で芸名を大蔵大夫といい、史書によると大和で生まれたが、その後父と共に甲斐に移り育つたといふ。

大久保長安は武田信玄、勝頼の家臣であつた。武田氏滅亡後は、徳川家康に仕えた。やがて頭角を現し、天正十七、十八年の五ヶ国総検地で手腕を振るい認められ、諸国の金銀山開発に多大の功績をあげ金山奉行となつた。亦伊奈備前守忠次とともに総代官にも任せられ青梅、桐生、八王子等の町々の行政に当たるとともに治水等の土木事業を行つた。これらの功績により大久保姓を受け、石見守。三萬石を賜り、家康の第六子松平忠輝の付家老にもなつた。

慶長十八年（一六一三）六十九才で没するや「長安の生前に不正があつた」として大久保家の断絶と総ての所領を没収された。



■信松院

曹洞宗の古刹で金竜山と号し、天正十八年（一五九〇）武田信玄の息女松姫こと信松院殿月峰永琴大禪定尼の開基。開山は仏国普照禪師。本尊は釈迦牟尼佛。

寺宝は

徳川家康書簡、武田信玄筆跡、豊臣秀吉書、正徳四年（一七一四）仁科資真寄進目録。木造軍船（我が国最古の純日本式軍船模型）。木造松姫座像。

■松姫尼公の墓（卵塔）

墓地中央北向きにあつて墓を囲む玉垣は、延宝五年（一六七八）千人頭十名が寄進した。河野銀平以下の頭の名が刻まれている。

武田信玄公子女

長女	北条氏政	室（一五三六年生れ、歿年五十四才）
次女	穴山梅雪	室（一五四二年生れ、歿年八十九才）
三女	木曾義昌	室（一五四九年生れ、歿年九十八才）
四女	松姫	織田信忠と婚約（一五六一年生れ、歿年五十六才）
五女	菊姫	上杉景勝室（一五六三年生れ、歿年四十才）

武田信玄公息女

松姫さまの生涯



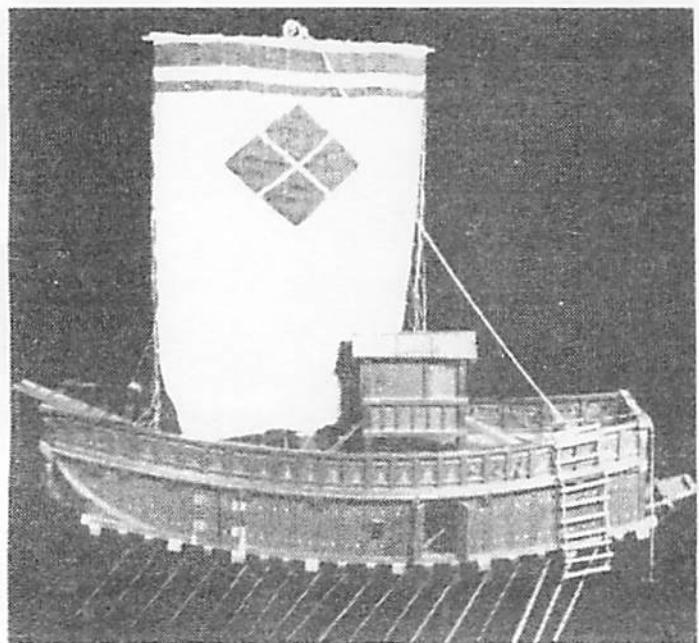
松姫さまは、武田信玄の四女として永禄四年（一五六八年）九月にお生れになりました。時あたかも父信玄は、宿敵上杉謙信と雌雄を決すべく川中島に出陣していたときであります。松姫さまは七歳のときに、織田信長の嫡子で当時十一歳の信忠と婚約いたします。当時の日本は戦国の時代で、とりわけ武田信玄の力が強大であります。新興勢力の織田信長も霸業を達成せんが為に、信玄と縁故関係を結びたいと松姫さまと信忠との政略結婚を急圖したのであります。元亀二年（一五七一年）、信玄は大軍を率いての宿願の上洛の軍を起しました。その信玄の行手に立塞がつたのが徳川家康であり、浜松の北一里にある三方ヶ原で合戦が行なわれました。その時に織田信長は家康のために援軍を送ります。この合戦は信玄の圧勝となり、信玄は信長が家康に援軍を送ったことて、松姫さまと信忠との婚約を破棄いたします。ところが不幸にも年が明けた天正元年、信玄は旅の途上で病を発して没します。信玄の後を嗣いだ武田勝頼も時代の流れには抗し難く、天正十年三月、織田・徳川両軍の侵攻の前に天日山で討死、ここに甲斐源氏の名門武田家は滅ぼするのであります。

さてその時の松姫さまはどうぞ、その年の正月に兄、仁科五郎盛信（信玄の五男で、信濃の名門仁科の家名を嗣ぐ）のすすめで、盛信の居城高遠城を訪れておられました。ところが織田の軍勢が攻めてくるという報せに、急ぎ甲府へ戻られます。その時松姫さまは、兄盛信の四歳になる香貴姫も伴ないます。護衛の武士に護られながら一行は、父祖の地甲斐の後にして見知らぬ他国の関東を指して落ちのびります。そして幾多の艱難の末にたどり着かれたのが、武藏国横山宿（八王子）の恩方村で、一先ず金照庵という小庵に落着かれます。やがて松姫さまは、ほど近くに在る曹洞宗の名刹心源院に随翁舞悦ト山和尚（勅賜仏國普照禪師）を訪ねられ、禪師の下で剃髪されて仏弟子となられます。そして法名を信松禅尼と称されました。御年二十二歳であります。天正十八年、松姫さまは御自身の庵を持たれるべく、当時の上野原宿で御所水の流れも清い景勝の地、

従所小の里へ移り住むます。そして庵を結はれた所が現在の信松院であります。この頃の八王子は北条氏照の治下にありました。然し時代は変遷を繰返し、武田を滅した織田信長は本能寺に明智光秀の為に殺され、光秀は羽柴秀吉に誅せられ、そして天正十八年、秀吉の小田原攻めで北条氏照の八王子城も陥落して、関東は徳川家康が管領するところとなります。扱て、御所水に住われた松姫さまは、武田一族の菩提を弔られる仏道精進の毎日であります。その傍らには糸を紬ぎ、絹を織れたりして織物の技を里人に伝えられます。又、近隣の子供達には手習いを教えられたりして、土地の人々から大変に慕われ尊られて平和な日々を

送られます。この時に松姫さまが伝えられた織物が、後世八王子織物として発展していくこととなつたのです。扱て関東へ入った家康は居城を江戸に定め、甲信への備えの為に八王子に千人同心を配置いたします。この千人同心は、元武田家に仕えていた旧臣達です。又、関東の総代官所を八王子に置き、総代官には大久保長安が任命されました。この大久保長安もかつては武田の家臣でした。異郷で新らしい生活に従事する千人同心も、又、大久保長安も八王子に田主の姫松姫さまがおられるということで、どれだけ心強く思えたことであります。家康も、信玄の姫松姫さまが八王子におられるを知つて寺領を贈り、時折りに消息を尋ねたりしてなぐさめられます。天下を統一した豊臣秀吉も慶長三年に病没し、天下は家康のものとなり、ここに江戸幕府三百年の礎が築かれます。時は移り元和二年四月十六日（二六〇六年）戦国の時代を力強く生き抜かれた松姫さまは、温かい人々に看まもられながら、眠るが如くに他界せられたのであります。御年五十六歳であります。法名信松院殿月峰永琴大禪定尼。奇しくもその翌十七日には徳川家康も逝去せられて、後に日光東照宮に祀られます。この東照宮の守護に就いたのが八王子千人同心であり、それが明治維新まで続いたことは、松姫さまをめぐつての奇しき因縁とも申せましょ。

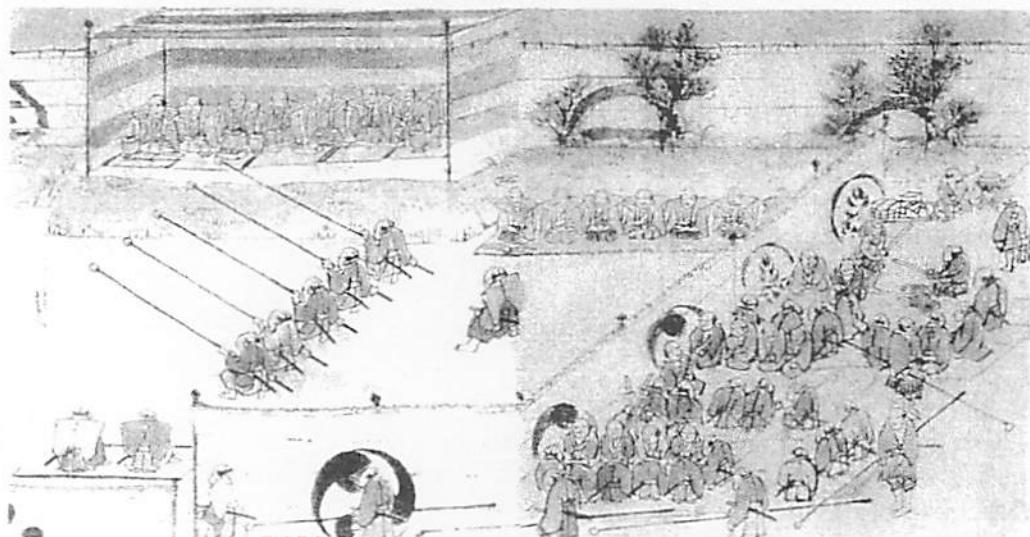
（文中、松姫さま外の人物名は尊称を略させていただきました。）



武田軍船安宅形雛形(東京都重宝) 信松院蔵



八王子千人同心



郷士調練（極楽寺藏『桑都日記続編』）

八王子市街を東西に走る甲州街道（江戸時代には甲州道中と呼ばれていた）に沿った一角には、「千人町」という街並がある。ここは、江戸時代、千人同心という幕府家臣団の一組織に貸与された、千人頭10家の拝領屋敷と10組の同心の一部が居住する組屋敷が立ち並ぶ武家屋敷町であった。明治維新とともに、これらの屋敷は明け渡され、現在ではその面影もない。

千人同心の母体となったのは、甲斐武田氏の小人頭に率いられた軍事集団であった。天正10年（1582）武田氏が滅ぼされると、徳川家康の配下となり、今から400年余り前の天正18年（1590）家康が関東の領主になるにあたり、甲武国境を警備する目的で八王子へ移されたと伝えられている。それ以来、278年間、明治維新により解体するまで、その本拠地は八王子から移転することはなかった。「八王子千人同心」と呼ばれているのは、そのためである。

千人同心は、最初は小人頭9人が率いる250人程の組織であったが、天正19年（1591）には頭を一人増やして10人とし、同心も500人となる。さらに、慶長4年（1599）には、関ヶ原の戦いに備えて同心を1000人に増やし、文字どうり千人同心の組織が成立した。以後、千人同心は、幕府の旗本である千人頭に預けられた御家人組織として、組頭100人、組頭の従者である持添抱同心100人、平同心800人で構成される。それぞれが、千人頭10人に均等に配属されて、10組100人ずつの組織であった。

その後、寛政4年（1792）に寛政の改革の一環として組織改正が行われ、組頭の持添抱同心を廃止して、同心は100名減員となる。そして、明治維新によって組織が解体するまで、時には欠員を生じながらも、千人同心の定員は900人を維持した。千人同心は、千人町の組屋敷に90人前後が居住していたほか、残りの大多数は八王子近在の農村に居住し、公務に携わるとき以外は農民としての日常生活を送るという半士半農の存在であった。

千人同心の公務は、初めの頃は関ヶ原の戦いや大坂の陣などの軍務が中心であったが、泰平の世になるにつれて、將軍の上洛や日光社参の供、江戸城修築時の警備などを務めた。そして、慶

安政5年（1652）6月に日光火の番が命じられ、神君家康をまつる東照宮の防火と警備が任務の中心となり、幕末までの間、途切れる事なく勤番が続けられる。日光での勤番は、年代によって異なるが、寛政3年（1791）以降は千人頭1人と同心50人（のち45人）による半年交代であった。

寛政の改革の前後から、南下するロシア人との接触が頻繁になるにしたがって、幕府は国防の必要から蝦夷地（現在の北海道）を重視するようになる。幕府の動きに応じて寛政11年（1799）千人頭原半左衛門は、千人同心の子弟を率いて蝦夷地に渡り、防衛の任務に着きたいという願書を提出した。翌12年（1800）幕府の許可が出ると、弟原新介と共に、100人の同心子弟を率いて蝦夷地に渡り、半左衛門は白糠（北海道白糠町）に、新介は勇武津（苫小牧市）に入植



千人頭 石坂弥次右衛門義礼（中央）

する。しかし、この計画も北辺の厳しい気候や風土に耐え切れず、多数の犠牲者を出して数年で中止せざるを得なかった。

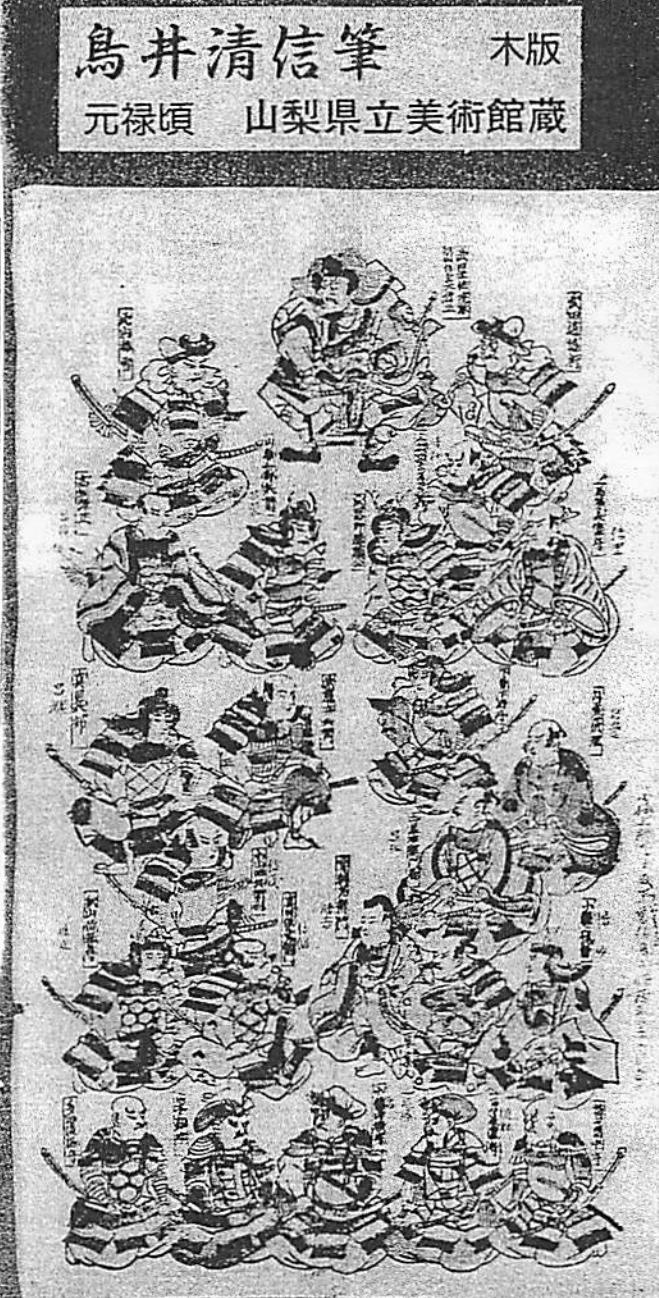
幕末になると、幕府の軍制改革とともに、安政2年（1855）には千人同心にも西洋銃修業が命じられる。やがて砲術訓練から本格的な銃隊による練兵教練へと進んでいく。このように近代的な軍事訓練を受けた千人同心は、文久3年（1863）鎧奉行配下から講武所奉行配下へと移り、慶應元年（1865）には陸軍奉行配下の一部隊として活動することになった。翌年には千人隊と改称され、千人頭は千人隊の頭と称されるようになる。この間、文久3年（1863）の將軍家茂の上洛供奉を皮切りに、甲州出兵、第二次長州出兵、横浜警衛などに矢張りに動員されていった。

しかし、明治維新により慶應4年（1868）6月、千人隊の組織は解体され、278年間続いた八王子千人同心もその最後を迎えた。大多数の同心家は「脱武」の道を選んで、農民となつたのである。



千人同心組頭二宮左門太光鄰

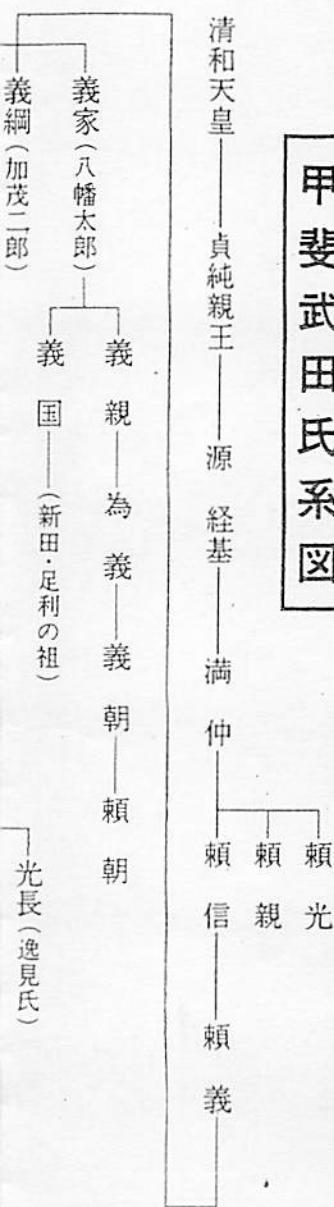
「武田二十四将図」



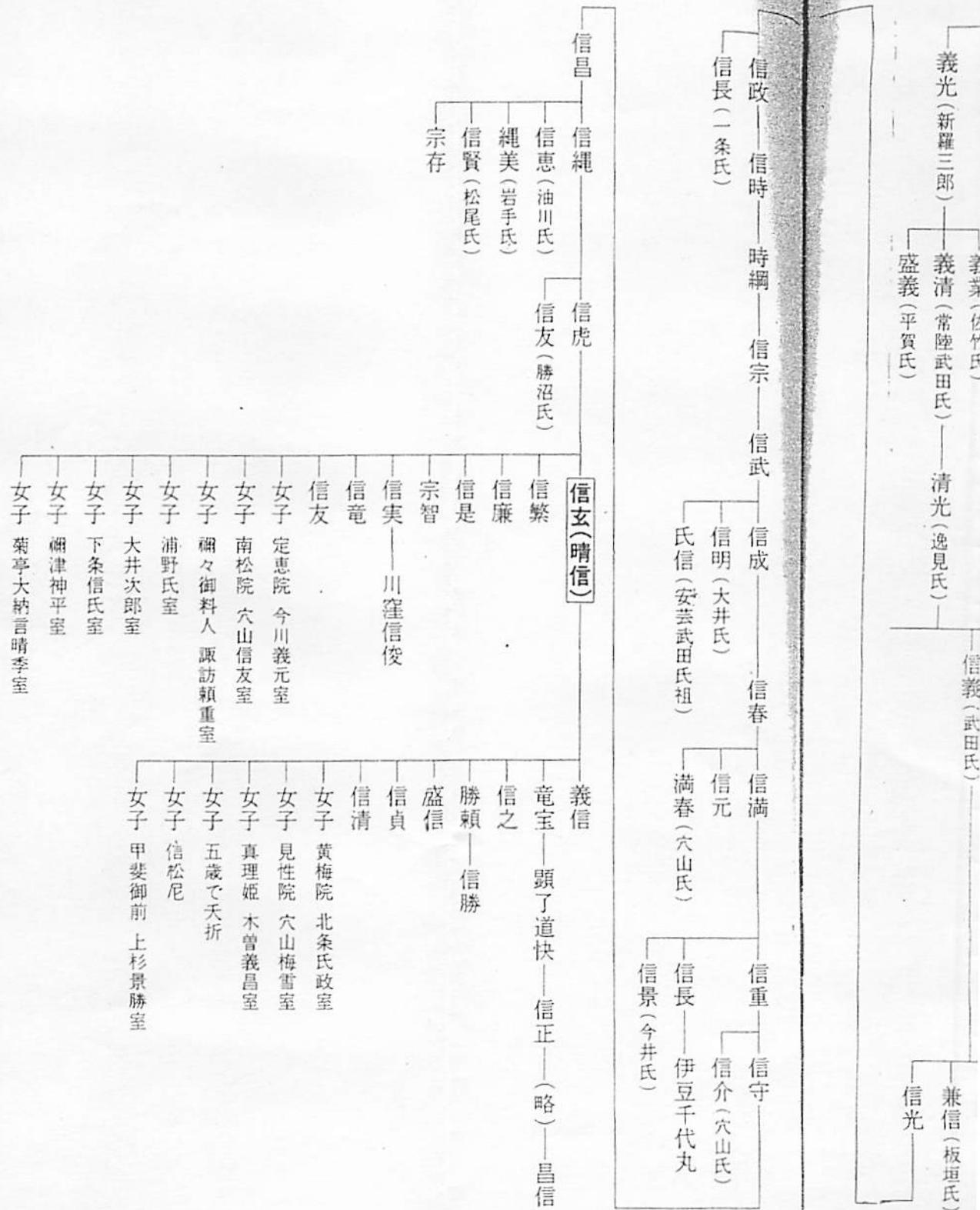
甲斐武田氏系図

倍判の丹絵版である。画像は役者絵の顔立ちに描かれ、信玄やその弟の逍遙軒は、清信画に見る初代市川団十郎に似せてある。この画像は今日見ることのできる「三十四将図」の中では最も制作の早い例であり、この頃には木版による需要があったことが窺われる。おそらくは、後世、本図のような版画を典拠として内筆や木版による「三十四将図」が制作されていったのだろう。

徳川十六神将図あるいは二十将図とともに、江戸時代の中頃から明治に至るまで盛んに描かれた画像に、「武田二十四将図」がある。「甲陽軍鑑」の町民層への普及と呼応するかのように出現し、かつての甲州軍団が内筆や版画となつて甦つたのである。



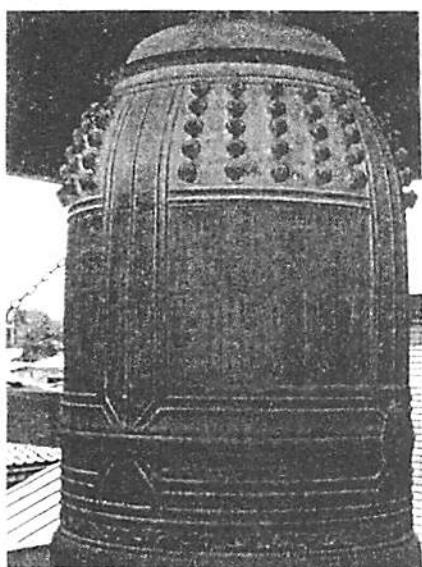
忠頼（一条氏）
有義（逸見氏）



時の鐘（念仏院）



念仏院



■時の鐘（時鐘山念仏院）

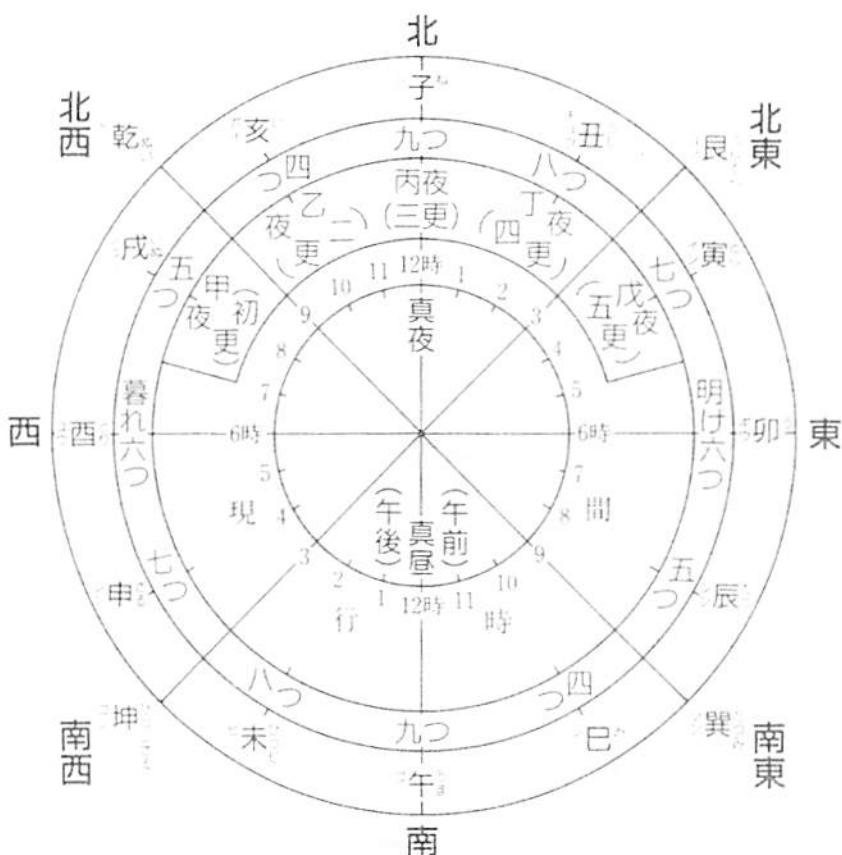
この鐘は町の人々に時を知らせるために八王子十五組、千人同心、近郷の村々の有志の淨財により元禄十二年（一六九九）鑄造されたものである。銅製で高さ一四八cm、口径七九cm、重さ八百kg。空襲で鐘楼は焼失、昭和二十八年に再建された。鐘は梵鐘と云い、多くは寺院の鐘楼堂に吊り鐘木で打ち鳴らし時を知らせる。梵は神聖・清浄を意味している。仏教寺院における梵鐘の使用はアジア各国に見られ、製作地によつて三つに大別される。日本の和鐘、朝鮮鐘、支那鐘である。



■八王子市郷土資料館

昭和四十二年四月一日開館。昭和三十八年春頃、中央高速自動車道の建設にともない行われた市内宇津木町向原遺跡の発掘を機会に、郷土の歴史資料を収集・保存の声が高まり、翌年三十九年には地元の陶芸作家井上郷太郎氏から、長年にわたつて収集された貴重な考古学資料約千点（井上コレクション）が市に寄贈された。これらの貴重な資料を収蔵・展示する施設として開館した。多摩地方の郷土博物館としては草分け的な存在となつた。資料館の前庭には貴重な石塔が集められており、庚申塔、馬頭観世音三界万靈塔、二宮尊徳像、高尾山道標等十三種を数える。

方位・時刻表(定時法)



[江戸時代 不定期法]

	12時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
夏至	
春分	
秋分	
冬至	
明け九つ	
明け八つ	
明け七つ	
明け六つ	
朝五つ	
朝四つ	
暁九つ	
暁八つ	
暁七つ	
暮れ六つ	
夜五つ	
夜四つ	
明け九つ	

※江戸時代には、定時法のほかに民間では不定時法が行なわれていた。不定時法は、夜明けと日暮れを境にして昼・夜をそれぞれ六等分したものであり、季節によって時刻の長さに変動があった。上に掲げた表は夏至(げし)・春分・秋分・冬至(とうじ)の時刻を例示したものである。

参考資料

歴史と浪漫の散歩道

歴史読本

真松院のしほり

日本の梵鐘

八王子文化財ガイドブック

新人物往来社

金竜山信松院

坪井良平 青燈書房

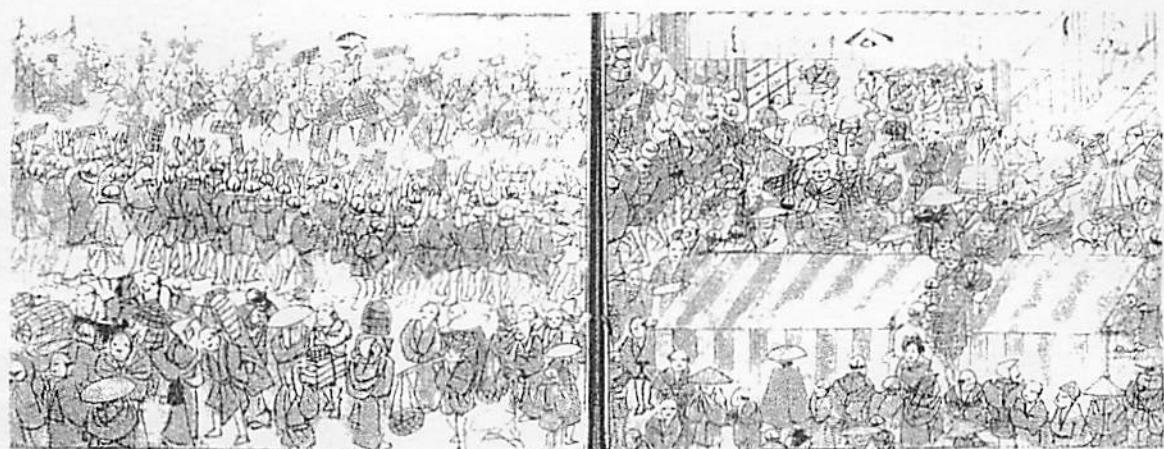
「信松尼公 肖像画」



千人頭河野家伝來のかぶと



養蚕の図



桑都朝市